

平成24年度共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名	和文：環境中に放出された放射能に関する研究 英文：Evaluation of the erupted radioactivities into the environment.
研究代表者	大橋 英雄（東京海洋大学）
参加研究者	兼保 直樹（産業技術総合研究所 主任研究員） 鈴木 芙美恵（東京海洋大 技術補佐員） 佐野 有司、蒲生 俊敬、白井 厚太郎（大気海洋研究所）
研究成果概要	<p>1. はじめに</p> <p>一昨年3月11日に発生した地震・津波により引き起こされた福島第一原子力発電所の事故で、環境中に少なからぬ量の放射性物質が放出された。これらのうち、降雨・大気・土壌・海水中に含まれる放射能を、なるべく多くの地点で定期的にサンプリングを行い計測していくことは、研究者間のみならず社会的にも必要であると考ええる。</p> <p>2. 方法</p> <p>・昨年度に福島県川俣町教育委員会の協力により、3ヶ月おきに町内の6ヶ所の小・中学校のプールの水を採取し、その放射能を測定した。今年度は水をイオン交換樹脂に吸着させたものを測定試料とした。</p> <p>3. 結果</p> <p>・プールに固定された^{134}Cs、^{137}Csは、時間経過により降下したエアロゾルが蓄積することにより、濃度が上昇することが予測されたが、山木屋中の値が約2倍に増えた以外は、同程度もしくは減少傾向であった。この減少傾向は、降雨によりプールの水が溢れたことが主な要因と考えられる。</p> <p>山木屋中も含めた結果を説明するには、プール内部での放射性核種の分布・挙動や気象条件等も加味する必要があると考えられる。</p> <p>これらの要因を考慮した上で、空間線量と溜まり水の放射能濃度の関連性を明らかにすることができれば、すでに各地で観測された空間線量と気象情報を元に、池沼等も含めた溜まり水の放射能濃度の推移を見積もることができるのではないかと考える。</p>
整理番号	